国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和2年11月1日発行　第44巻第11号通巻第518号

月刊みんぱく

2020 11月号

特集

世界温泉めぐり

世界の温泉にわけいる　南真木人
生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉　野林厚志
社交と癒やしの場　菅瀬晶子
メキシコの蒸気風呂、テマスカル　禪野美帆
ドイツの温泉事情　山中由里子

よく似た国で、いつものひとつ風呂

葛西（かさい） 暢人（のぶひと）

スジャック・スー・カプルジャに行くといい――はじめてそう勧められたとき、トルコ語力も不足していて、意味が分からなかった。スジャック・スーは「湯」という意味だ。ではカプルジャって？

トルコ語でカプルジャとは「温泉」なのだ。有名なトルコ風呂「ハマム」は湯船のない蒸し風呂だ。温泉があるとは予想していなかったから、ハマムとは別物の、湯船がある風呂であることを何度も確認した。

安宿ばかりでバスタブ付きの部屋には泊まっていない。日本でも温泉めぐりは大好きだ。湯につかることのできる温泉があると聞きつけたら、もはや予定などどうでもよい。大急ぎで勧められた温泉地、ブルサ行きのバスに乗り込んだ。

「カプルジャへの行き方を教えて！」宿に着くなり部屋の検分もそこそこに、風呂に向かう。

これはすごい！　湯の使い方がぜいたくなのだ。湯船に注がれる湯はもちろん、客が桶（おけ）ですくってかぶる湯の量も景気がいい。その桶は直径二〇センチメートルぐらいの金物で、それほど湯が入らない大きさだから、カランから流れる湯を団扇（うちわ）であおぐがごとく、ザバリザバリと豪快に浴びる。そして、深めに張られた湯の中で悠々と過ごす。

浴室への入り方はハマムと一緒だ。男の場合、風呂で手渡される腰巻きを着用する。ゆったりした水着を持参する客も多い。「素っ裸」というわけにはいかないが、大いに満足である。

トルコにはおよそ五〇〇の温泉がある。山の秘湯、海辺の湯、湯治場のような温泉地から、近代的な温泉リゾート施設まで、雰囲気はさまざまだ。

腰巻きや水着を着用したり、建物の設（しつら）えや風呂場の桶が変わっているなど道具立てに違いはあれど、入浴文化は日本と大変よく似ている。体を洗いもせずに湯船に入るような日本で嫌がられることは、トルコでもたいていマナー違反である。日本と同じ振る舞いで、おおむね正解となる。だから海外といえど気楽なのだ。

似ているといえば、温泉ホテルに卓球台が並んでいるのを目撃したときには、目まいがするほどの衝撃を受けた。トルコ人が考えることは日本人と同じなのであろう。

トルコと日本は離れていても、よく似た文化がある。普段とは違うエキゾチックな興奮を味わうばかりが海外旅行の魅力ではない。親しみのわく習慣がある土地で、ほっとする時間を過ごす海外旅行もまた楽しい。

プロフィール
1969年神奈川県生まれ。高校時代にシルクロードを陸路で旅行して以来、海外旅行に熱中する。早稲田大学大学院修了。早稲田大学助手、日本女子大学非常勤講師を経て、『早稲田学報』担当など出版・編集業に携わる。著書『魅惑の温泉めぐり トルコ』（新樹社）のほか、ウェブなどで国内外を問わず「お出掛け」の楽しさを発信している。

月刊 みんぱく

11月号目次

1 エッセイ　千字文
よく似た国で、いつものひとつ風呂
葛西 暢人

特集　世界温泉めぐり

2 世界の温泉にわけいる
南 真木人

4 生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉
野林 厚志

5 社交と癒やしの場
菅瀬 晶子

7 メキシコの蒸気風呂、テマスカル
禪野 美帆

8 ドイツの温泉事情
――なぜわたしがバーデン・バーデンに行ったことがないか
山中 由里子

10 ○○してみました世界のフィールド
ユートピアの廃墟
王寺 賢太

12 みんぱく Information

14 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
森の民の知恵
――バスケタリーの起源をさぐる
池谷 和信

16 みんぱく回遊
牧畜民のテントをめぐる
辛嶋 博善

18 シネ倶楽部 M
信仰と官能のあいだで
――「バベットの晩餐会」
新免 光比呂

20 ことばの迷い道
先生、僕にはアブガイが３人いるんだよ
島村 一平

21 次号予告・編集後記

特集

世界温泉めぐり

温泉には火山性のものやプレート構造に由来するものなどがあり、その泉質や利用の仕方は地域によってさまざまだ。本特集では世界の温泉を縦横にめぐり、その歴史や特徴を概観し、またそれが人びとの暮らしのなかでどのように位置付けられているかを紹介する。

世界の温泉にわけいる

南真木人
民博 学術資源研究開発センター

多くの日本人にとって温泉は、観光にしばしば付随する旅の目的のひとつであり、心身をリフレッシュしてくれる非日常の場であろう。温泉が豊富な土地であれば、近隣の温泉を日常的に利用する人も少なくないはずだ。古来、日本人は温泉を好み、情緒ある温泉街や湯治場まで生みだしてきた。だが、海外の温泉となると、入ったことがある人はあまり多くないようだ。そもそも世界の温泉情報は限られており、海外旅行ツアーに温泉が含まれることも稀である。海外まで行って温泉？という心理があるのだろう。国内とは対照的に海外旅行では、旅の目的のひとつに温泉があがることはあまりない。かくいうわたしも、中長期で何度か滞在してきたネパールとトルコで、かなり前に入ったきりだ。世界の温泉は人口に膾炙することがない未体験の領域といえそうで、そこにわけいってみようというのが本特集のねらいである。

偏在する温泉

世界を見渡すと、温泉は環太平洋造山帯（火山帯）やアルプス・ヒマラヤ造山帯、アフリカ東部の大地溝帯などに偏って分布する。火山があり地震も多い北米西海岸やチリ、ニュージーランド、台湾などの環太平洋の国ぐにには温泉がある。他方、ユーラシア大陸では、地下のプレートとプレートがぶつかり合う構造線に沿って温泉が湧く。マグマと接した地下水が熱せられて湧き出るためで、アイスランド、ドイツ、トルコなどヨーロッパや中東の温泉の多くはこれにあたる。

日本の温泉がそうであるように、世界各地の温泉の成分や色は源泉の泉質によって多種多様で、温泉の基準も各国の法律によって異なる。共通しているのは、湯の成分に効用が見出だされて浴用や飲用に供され、療養や保養に用いられていることだ。ただし、水着などを着るか全裸か、男女別か混浴か、レジャー的か療養的かなど、その入り方は各国の文化的・歴史的な背景により違ってくる。本特集ではネパール、台湾、中東、メキシコ、ドイツの温泉やサウナをめぐってみたい。

ネパール中部ラスワ郡チリメにある露天風呂（1987年）

チリメの温泉脇の宿泊小屋と先客のタマン人。独特のフェルト帽をかぶる（1987年）

ネパールの温泉「タトパニ」

ネパール語で温泉は「タトパニ」というが、文字どおりには「熱い水」「湯」を意味し、標高二〇〇〇メートル前後の山地に東西に走る主中央衝上断層帯に点在する。海洋プレートがもぐりこんで大陸プレートを衝き上げ、ヒマラヤを隆起させている断層だ。約三〇カ所あるといわれる温泉は、ここ二〇年のあいだに未舗装道が通じたところもあるが、かつては徒歩でしか行けない山中にあり、地元の人だけが利用する秘湯だった。特に印象に残っているのは、一九八七年に仲間とともに訪れたラスワ郡チリメの温泉だ。息を切らして斜面を登ると、忽然と茶色の湯を湛えた大きな露天風呂があらわれた。人里離れているので宿泊小屋もあり、たすき掛け布に両腕を入れた先客のタマン人の女性と子どもが、湯につかるわたしたちを呆然と眺めていた。八十年代の温泉とは、数本のパイプから湯が出る水汲み場のようなもの、川岸に石で囲った湯だまりのようなものがほとんどで、チリメの湯船は別格だったのである。

湯治客向けの宿や飲食店が軒をつらねるミャグディ郡の宿場町（2001年）

観光地前夜の湯治場

現在は多くの温泉が石積みかコンクリート製の湯船を備え、入浴料が地元の学校の運営費として活用されるなど地域経済を潤すところも出てきている。二〇〇一年に見たミャグディ郡の温泉は川岸に屋根つきのプールのような湯船が備わり、そうした温泉の先駆けといえる。療養を目的に地域一帯から湯治客が集まり、湯治場とよびうる宿場町ができて巡礼地のように賑わっていた。下着をつけて湯船に入り、暖まると頭から毛布にくるまって川原にうずくまる。これを繰り返すのがネパール流の湯治だ。現在ここは一日に数千人が訪れる一大温泉地になっているらしい。先のチリメの温泉も一〇軒ほどのロッジが建ち、「タマン遺産トレイル」を歩くエコツアーの外国人客で一時は賑わっていたが、二〇一五年のネパール地震で温泉も被害を受け、ツアー客が激減していると聞く。

二〇〇〇年代に入り施設が整備されてきた温泉だが、首都カトマンドゥの友人でこれらの温泉に入ったことがある人をわたしは知らない。集客域は以前より広がったとはいえ、国内温泉ツアーがあるわけではなく、都市住民が訪ねる「観光地」にまではなっていないのだ。街道を外れたところに、今なお地元の人しか知らない名湯があるのではないか、そんな期待をもたせてくれるのがネパールの温泉なのである。

生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉

野林（のばやし） 厚志（あつし）
民博 学術資源研究開発センター

このエッセイを書くにあたり、グーグル検索で台湾の温泉めぐりをしてみた。案の定、台湾には温泉が多いことをあらためて知ることになった。経済部（日本の経済産業省にあたる）の中央地質調査所によれば、温泉の「露頭（ロウトウ）」、すなわち源泉のある場所は一五〇カ所にのぼるという。台湾は日本の九州ぐらいの大きさなので、九州と温泉密度を比較するのもよいかもしれない。とはいえ、台湾の温泉の歴史はそれほど古くはない。

瀧乃湯の表玄関（2000年）

植民地と温泉

オーストロネシア系の原住民族の人たちが日常的に温泉に入っていたのかどうか、それに関する明確な歴史記録は残されていない。一七世紀以降の大陸中国側からの移民である漢族系の人たちにも、温泉につかるという習慣はなかった。台湾で温泉に入る習慣をつくったのは、台湾を植民地統治した日本人であったといってもよい。

植民地時代に総督府がおかれ、政治や商業の中心となった台北の郊外に、日本人は北投（ほくとう）という温泉街をつくった。北投の温泉は台湾で貿易にたずさわっていたドイツ人商人が、日本統治が始まる少し前に発見したのだが、日本統治が開始されてから日本人による温泉経営が始まった。植民地時代の温泉は当初、現地に赴任した警察関係の人たちの保養施設として設けられたところが多かった。その後、台湾におもむく日本人が増え、温泉は重要な観光資源となり、各地に温泉街がつくられた。場所によっては女性の性的な接客をともなう施設もつくられ、これらが第二次世界大戦後も続いたことから、台湾における温泉の評価はさまざまであった。

現在でもこのあたりは温泉旅館が軒を連ねている。一九〇二年に開業した銭湯である「瀧乃湯」はいまも営業を続けている。わたしもずいぶん前に入浴したことがあるが、とにかく熱くて、湯船に入るどころか湯あみもできず、汗だけかいて出てきた記憶がある。今ではリニューアルして、今時の銭湯になったとかならないとか。

このときに歩いた北投の温泉旅館街は印象深いものがあった。店の看板に熱海や京都、はては浅草といった日本の地名やひらがなまじりのものが立ち並んでいた。これが日本統治時代の名残なのか、それとも日本の温泉文化の掘り起こしなのかは、わたしにはよくわからないが、近年では日本の有名な老舗旅館やリゾートグループが進出したことでも話題をよび、台湾における日本と温泉の不可分な結びつきを感じずにはいられない。

北投温泉の案内看板（2000年）

めぐる観光資源

一九九〇年代以降、台湾の民主化が軌道にのり、あらたな社会づくりが目指され、その影響は温泉にもおよんだ。一九九九年は台湾の温泉観光元年ともいえる年で、温泉資源の環境保全および持続的な発展を目指した制度が整えられた。二〇〇五年には温泉法が施行された。この温泉法の特徴は、温泉の役割に原住民族の文化や経済の発展を見出だしていることである。

台湾では、温泉の多くが原住民族の居住地にあり、これも先住者の財産のひとつといってもよい。例えば、台北郊外にある烏來（ウーライ）温泉は、タイヤル語で温泉を意味するulayにちなんだ名前のタイヤル族の集落を中心としている。タイヤル族の民族博物館があったり、売店で温泉玉子と並んで売られているのは、原住民特製イノシシソーセージだったりと、単なるお湯場にとどまらない観光地となっている。

もともとは生活に根ざしていた温泉という生態資源が外部者とのかかわりのなかで観光資源となり、観光資源となった温泉がさらに土地の人たちの文化や食べ物を観光資源としていくという、温泉のつくる回路のようなものがそこに見えてくる。

烏来温泉の売店（2008年）

社交と癒やしの場

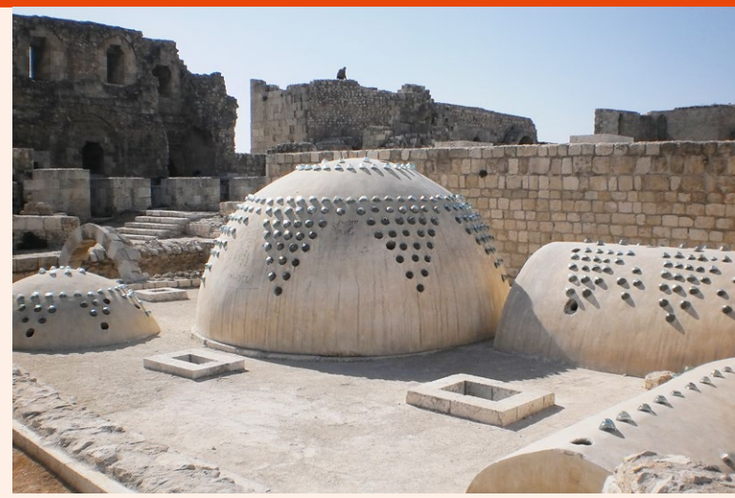
菅瀬（すがせ） 晶子（あきこ）
民博 超域フィールド科学研究部

歴史ある中東の「温泉」

中東と温泉。いかにもミスマッチに聞こえるが、じつは中東にはいくつもの天然温泉が湧き出ている。なかでも大地溝帯の北端であり地上最低地点である死海やガリラヤ湖の周囲には多く、イスラエルのハマット・ガデルやヨルダンのハンマーマート・マーインなどは、古代から有名な保養地であった。ハマットはヘブライ語で温泉、ハンマーマートはアラビア語で浴槽のある風呂を意味するハンマームの複数形である。天然温泉の意味もあるものの、今日ハンマームといえば、それはほぼ街なかにある蒸し風呂の公衆浴場を指す。

イスラーム圏で発達し、家庭に風呂が普及した今でも人びとに愛されるハンマームは、ギリシア医学とともに古代ローマ帝国から受け継がれたものだ。身体を清潔に保つだけではなく、社交と娯楽の場であったことも共通している。相違点を挙げるとすれば、古代ローマの公衆浴場は商店や劇場、宗教施設までそなえた一大娯楽施設であったが、イスラーム圏のハンマームは入浴とその後の休息に目的が絞られているという点だろう。古代ローマ時代には冷浴プールがあったが、ハンマームでは代わりに噴水と談話室が広くとられている。蒸気浴と垢（あか）すりで身体を手入れした後は、噴水で涼感を愉しみながら喫茶やおしゃべりに興じ、ゆったりと心身を休めるというのが、ハンマームでの人びとの過ごし方である。

ハンマームはまた、独特の建築様式を発展させたという点でも、魅力的な存在だ。イスラエル、ガリラヤ地方の古都アッカの旧市街には、ハンマー



シリア北部アレッポの城塞内にあるハンマーム。その歴史は13世紀に遡る。城塞は紛争で砲撃を受け、現在も補修が続けられているという（2011年）

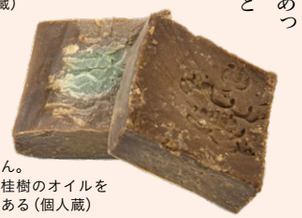
ム・アル＝バシャという、オスマン帝国時代のハンマームをまるごと保存した博物館がある。ここで見るべきは、やはりハンマームに不可欠の、高いドーム天井だ。明かりとりのための小さな円形のガラス窓がたくさんついていて、幻想的な雰囲気をかもし出す。この特徴的なドーム天井は、イスラーム圏の大都市ならば、古い街区で必ず見かけるものだ。歴史の変遷のなかで廃業の憂き目にあっても、その建築を惜しむ人びとがバーやレストランに改装し、今に残しているところもめずらしくはない。

ダマスカスのハンマーム体験

ハンマームには調査の合間に何度か行ったことがあるが、とりわけ印象に残っているのは二〇一一年二月、紛争状態になる直前のシリアのダマスカスでの体験である。旧市街バーブ・トゥーマのモスクのすぐ脇に、その古びたハンマームはあった。貴重品と荷物を受付で預けると、垢すりの四角い手袋と、アレッポ名産のオリーブオイルと月桂樹（げっけいじゅ）の石けん、それに番号札を手渡された。垢すりの順番になると番号を呼ばれるので、それまで身体をあたためておくようにと言われる。

服を脱ぎ、布一枚になって大理石の床に寝転ぶと、たちこめる蒸気の向こうに、丸い明かりとりの窓から夕刻の弱い光が差し込んでくるのが見えた。真冬のせいか温度が低く、身体がぬくもるという実感にやや乏しいが、この蒸気にゆらめく光には、絶大な癒やしの効果があった。いつの間にか、うとうととと居眠りをしてしまったらしい。

ダマスカスのハンマームからもち帰った垢すり手袋（個人蔵）



アレッポ産の石けん。中心の緑色は、月桂樹のオイルを使用している証である（個人蔵）

番号を呼ばれてはっと気がつくと、ベテランとおぼしき垢すり係、ムカッイセの女性が、むっつりとした表情で待っていた。指定された場所に横になると、乱暴にわたしの腕を引っ張りながら、ため息混じりにこんなことを言う。「今日はあんたで三〇人めだよ。もう肩も腕もだるくって、くったくただ。ああもう、さっさと帰りたい！」。日本ではまずありえない対応にめんくらってしまい、「そう、お疲れさま……」としか返せなかったのが、少々心残りである。肝心の垢すりはといえば、本当に垢が落ちているのかと心配になるほど生ぬるいものではあったが、入浴後にミントティーをすすりつつ、にぎやかに歓談する地元の人びとの姿を眺められたのは、貴重な体験であった。

今もあのハンマームと、そこに集う人びとが、無事であることを切に祈る。

トルコのハマムで使用されていた桶（個人蔵）

トルコのハマムで使用されていたサンダル（個人蔵）

メキシコの蒸気風呂、テマスカル

禪野（ぜんの） 美帆（みほ）
関西学院大学教授

大小のテマスカルがある（メキシコ市、2007年）

メキシコに、テマスカルとよばれる一種のサウナが存在する。しくみは、火で石、もしくは壁を熱し、そこに水をかけると蒸気が出るという、まさにサウナの原理である。それは先スペイン期から先住民が使っていたものだが、現代のメキシコの先住民が皆それを使っているかというと、そうではない。体験したことのない先住民もいるかもしれない。

オアハカの村落のテマスカル

わたしは、調査していたオアハカ州の先住民村落で、一九九〇年代にテマスカルに入る機会があった。村の中心地で商店を営む家が、空いた大きな部屋の内部にテマスカルをもっていた。しかし、普段は使っている様子はなかった。そのテマスカルは最大でも二名しか入れず、立ち上がることもできないような、狭く暗い空間であった。裸で入るとなかには治療をおこなう女性がいて、手に薬草と思われるものをもっていた。ちょうど神棚に備える榊（さかき）のような大きさである。その女性の家にわたしは泊まっていたので、テマスカルに招待してくれたのである。しかしわたしは、そのテレサおばさんが治療の力をもっているとは知らなかった。おばさんは商店主の姉なのだが、少し治療の心得があるという程度だったのかもしれない。

テマスカルのなかで、おばさんはときどき壁に水をかけて蒸気を上げ、怒ったような声を出しながら手にした薬草でわたしの体をたたいた。そもそも内部は日本で普及しているサウナと比べてもひどく熱いのに、それが体に触れるたびにものすごく熱く、うめき声を出さずにはいられなかった。雰囲気としては悪霊を祓（はら）うかのようである。この苦行から一刻も早く解放されたいが、おばさんがいいと言うまでは外に出られない。多分一五分以上はなかにいた。交代で、元々治療を依頼していた若い女性も入った。彼女はおそらく出産後だったのだと思う。産後の女性がテマスカルに入るというのは伝統的な行為であると、考古学関連の雑誌でも紹介されている。テマスカルから出ると、体は汗だらけで薬草の匂いもついていた。とても水浴びをしたかったが、それはテマスカルとセットではないようで、そのままおばさんの家に帰って寝ることになった。

ニューエイジな雰囲気に満ちた出入り口付近（メキシコ市、2007年）

メキシコ市のテマスカル

二回目の機会は二〇〇七年、首都メキシコ市内の旧先住民村落であった。この地区に住む母娘、さらに孫娘と一緒に、テマスカルを扱えるという男

性に有料で頼んでみようということになった。彼女たちは初めてテマスカルを体験するとのことであった。四十〜五十代のその男性は、「ある日雷に打たれて、啓示を受け、さらに修行をしたのだ」と説明してくれた。テマスカルの出入り口付近には一六世紀の絵文書からコピーした、しかしオリジナルからはかなり逸脱した絵などが描かれていた。男性は野外で薪を燃やして岩石を熱し、それをドーム型の大きなテマスカルの中央に置いた。手に薬草はもっていなかった。わたしたちは下着に大きめのTシャツなどを着て入った。このテマスカルは大きく、男性を含めて五人で入ってもまだ余裕があった。男性は声を荒げることもなく、オアハカの村のように熱すぎて苦しいということもなかった。一時間ぐらい入っていたと思うが、終盤ではオレンジの香りのする水かオイルも石にかけられた。テマスカルから出ると、男性から感想を求められた。このように、男性が治療師になった経緯を説明されたり、アロマの香りがしたり、感想を求められたり、テマスカルに古代メソアメリカ文明の神をモチーフにした絵が描いてあったりと、ニューエイジな感じは否めなかった。一緒に入った女性の家に帰って皆すぐにシャワーを浴びたが、本来はシャワーに入ってはいけないのかもしれない。

テマスカルの特徴は、何といっても治療師と一緒に入ることである。現在のメキシコでは、観光地でテマスカルに入るチャンスはある。希望する人たちの多くは神秘的な体験を求めているはずで、インターネット上の案内でもそうした雰囲気が演出されている。メキシコ市のテマスカルはそれに近い感じであった。しかし、わたしは、治療師に悪霊祓いのような怒りの声を浴びせられて、あまりの熱さにうめく方が効果が高い、別の言い方をすればご利益があるような気がする。ただ、先住民村落に暮らしていない者がそのようなテマスカルに入ることは難しいだろう。

ドイツの温泉事情

——なぜわたしがバーデン・バーデンに行ったことがないか

山中 由里子（やまなかゆりこ）
民博 学術資源研究開発センター

温泉のなかの温泉

老いも若いも、ぴちぴちもしわしわも、人間って十人十色で本当に不思議だなぁ、「人心の同じからざるは其の面の如し……」。と、温泉の湯船につかりながら人様の体をまじまじと観察し、その人の生き様を勝手に想像しながら存在論的思考に耽（ふけ）る。海外から日本に帰ってきて、「やっぱり日本はいいなぁ」と思う瞬間である。

文献調査や会議でよく行くドイツにも温泉はある。なかでもローマ皇帝カラカラも湯治をしたという南西部のバーデン・バーデンは、「温泉のなかの温泉」という意味の名前に違（たが）わず、世界的に有名な保養地である。まさにカラカラ大浴場に倣って一九世紀後半に建てられたフリートリッヒ浴場は、今でも温泉施設として使われていて、一度は行ってみなければと思いつつ、日本とはまったく違う入浴の仕方に抵抗があり、まだ訪れたことがない。

ドイツの温泉には、水着を着て入るレジャープール式や、全裸でさまざまな温度の風呂やサウナを順繰りに廻（まわ）る古代ローマのテルメ式などがある。また、医師や療法士の指導のもとに疾病を治す目的でおこなう本格的な湯治（クア）もある。バーデン・バーデンのフリートリッヒ浴場はテルメ式で、フルコース廻ると、シャワー→温風浴→熱風浴→シャワー→泡ブラシマッサージ→シャワー→蒸気浴→さらに熱い蒸気浴→温泉（三六度）→渦流浴（三四度）→水中運動（二八度）→シャワー→冷水風呂（一八度）→温かいタオルで体をふく→クリームマッサージ→くつろぎ部屋→読書室と、なんと一七行程もあるそうだ。

とても気持ちよさそうではあるのだが、わたしにとってハードルが高いのは、全裸・混浴が基本という入浴のお作法である。日本人女性でも、慣れるとその解放感がたまらないというツワモノもいるし、日本でもむかしは混浴が当たり前だったのだろうが、異性の他人に裸を見せるのは恥ずかしいという羞恥心は、かなり根深く刷り込まれているようで、疲れを癒やすどころか逆に緊張して肩が凝りそうで、わたしはどうにもなじめない。

バーデン・バーデンのフリートリッヒ浴場。2020年は秋まで休業が決定 ©GNTB/ Francesco Carovillano

健康的な裸体主義

これに対して、ドイツ人の裸体に対するタブー感覚はどうも違うようだ。ドイツには、フライケルパークルトゥーア Freikörperkultur、略してFKK（エフカーカー）という、文字どおりに訳すと「身体の解放文化」がある。日本ではFKKというと、ウッシッシ……な遊びができる「風俗」の場としてとらえている人も多いようだが、ちょっと勘違いである。もともとは、一九世紀の産業社会の急速な発展への反動としてヨーロッパ各地で起こった自然回帰運動がその起源にあり、さまざまな拘束から身体を解き放ち、自然のなかで文字どおり自然体で過ごそうよ、という極めて健康志向の裸体主義である。

湖畔や海辺、都会の公園にも、真っ裸で日光浴や運動をする人のためのFKKゾーンが設けられているが、その境界はときに曖昧で、普通にピクニックをしていて、いきなりドキッとするものが目に入ってくることもある。だが、「見たくないものを見せられた」と目くじらをたてる人はいない。裸体主義の積極的な実践者でなくても、裸に対してじつにおおらかな文化があるようだ。

この数カ月、マスク、フェイスガード、手袋、アクリル板、コンピューター画面という何重ものバリアで隔てられた人付き合いを強いられてきて、精神がだいぶ凝り固まってきている。あらゆる殻を脱ぎ捨てて、自然のなかを走り回れたら、さぞかし気分がよいだろうと思わないでもない。今ならコロナの反動で、FKKやドイツ流温泉に、チャレンジできるかもしれない。

オーストリア、ニーダーエスターライヒ州のバーデンの硫黄泉浴。20世紀初めごろの絵ハガキ。湯着を着たままの湯治の様子

○○してみました世界のフィールド

ユートピアの廃墟

王寺 賢太
東京大学准教授

かつて30にものぼる布教区が置かれたその土地は、いまや訪れる人影もまばらで往時の賑わいは見る影もない。「改稿」に秘められた歴史の舞台裏に思いをはせ、学者は異郷へと足を延ばした。

★ アルゼンチン、ミシオネス州

布教区の廃墟を訪ねる

アルゼンチンの東北に「ミシオネス」とよばれる地方がある。西をパラナ川対岸のパラグアイと接し、北はイグアスの滝までブラジル領に食い込んだ僻地である。ブエノスアイレスからこの地方の中心都市ポサダに飛び、そこからサンタ・アナ、ロレト、サン・イグナシオ・ミニと三つの集落を周遊したのはもう二年も前の八月のことだ。

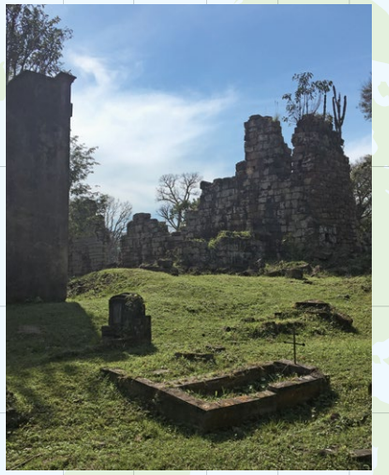
このミシオネス地方を中心に、パラグアイとブラジルに広がる領域には、一七～八世紀、最盛期にはおよそ三〇の「布教区」と総人口一四万のグアラニ人の「新信徒たち」を数え、近世カトリック宣教の最大の成果として、ヨーロッパで毀誉褒貶の激しい議論の的になった、イエズス会パラグアイ・ミッションがあった。もっともそのミッションも、一八世紀後半、大西洋世界に革命の時代の到来を告げた七年戦争の時期に、イエズス会がポルトガル、スペインの両王国から相次いで追放され、あえなく消滅してしまう。近世フランス思想史を専門とするわたしがわざわざミシオネスまで足を延ばしたのは、この布教区の廃墟を見るためだった。

サンタ・アナの聖堂跡（2018年）

興味深い叙述の変化

二〇一四年から一八年にかけて、齋藤晃さんの指揮する民博の「近世カトリックの世界宣教と文化順応」共同研究班に誘われたときに、わたしが喜んで参加を決めたのも、この機会に、自分が長年の研究対象としてきたギヨーム＝トマ・レナルとドニ・ディドロの共著、『両インド史』のパラグアイ・ミッションに関する叙述を正面から論じたいと思ったからだった。その叙述が、ちょうどミッション廃止直後の一七七〇年初版から一〇年後の一七八〇年版まで、じつに興味深い変化を見せることが、かねてから気に掛かっていたのだ。

レナルは当初、このミッションをイエズス会士の賢明な「文明化」によって、宣教師たちの精神的導きのもとにグアラニ人たちが自治をおこない、共有財産制の下で規律正しく調和に満ちた共同生活を営むユートピアとして描いていた。それが現実なら、布教区廃止後、グアラニ人たちは宗主国に対してこの神権政と共有財産制の共同体を守るために立ち上がるだろう――レナルはそんな先住民独立の可能性さえ夢想していたのだ。しかしその一〇年後、蜂起が起こらなかったことを見届けたディドロは、このユートピアの叙述を打ち消してしまう。曰く、所有権を知らないグアラニ人たちは、自由も物の交換のもたらす喜びも知らず、倦怠を覚えていたに違いない。文明化にあたっては自由を尊重すべきであり、平等によってそれを損なってはならないのだ……。こうして『両インド史』一七八〇年版のなかで、アメリカ植民地独立の希望は、むしろ植民者たちが自ら開墾し、所有する土地に創設を宣言したばかりの北米合衆国に託されることになった。


サンタ・アナの墓地跡（2018年）

夢のあとに思いをはせる

この改稿をどう理解するかは、齋藤晃編『宣教と適応』（名古屋大学出版会、二〇一〇年）所収の拙論に譲るとして、わたしは布教区の廃墟のなかで、これがユートピアでありえたかもしれない場所であることをしきりと思っていた。「集落」というには余りに大きな、矩形に区切られた街区の中心に置かれた聖堂の赤茶けた廃墟は、かつての威容を今に伝えている。その周囲に配され、整然と区切られた新信徒たちの住居はさながら二〇世紀の公団住宅や社宅街の先駆けのようだ。聖堂の傍らには墓場、裏手には宣教師たちが農業のための実験に使ったという植物園もある。しかし今やそのすべてが、南米の冬の青空の下、草に覆われていた。観光地化したサン・イグナシオ・ミニを除けば、サンタ・アナにもロレトにも訪れる人は少ない。なにより往時には数千人が住んだはずのどの布教区にも、もはや一人のグアラニ人もいない。一九世紀初頭の南米諸国の分裂・独立の途上でミシオネスが争奪の対象となったこと、やがて国家とともに到来した資本主義化の下で住民たちが労働者として大挙してこの地方を後にしたことが原因らしい。

夜、ポサダのホテルのバルコニーで煙草をくゆらせ、パラナ川対岸のパラグアイの街の灯を見ながら、わたしは世が世ならここにニューヨークがあってもよかったのだ、と空想にふけっていた。古い文献を読みすぎた学者の妄想だろうか。しかし異郷への旅は、わたしにはいつもそんなふうに、過去の文献に託された夢とそれを読むわたしの現在を相互に照らし合わせ、その合わせ鏡のなかで過去から現在を問い返すささやかなきっかけを与えてくれる。そんな旅にまた出かけることができるのはいつになるだろうか。

みんぱく
Information

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

特別展「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？　「宝」にこめられた思いとは何なのか？　本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

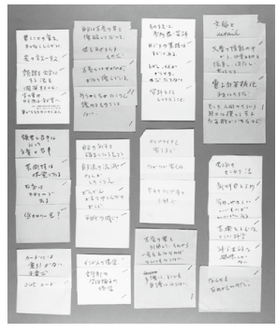
会期　12月15日(火)まで
会場　特別展示館

仮面（マレーシア、オラン・アスリ）

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタル・データベースをとおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。

会期　12月1日(火)まで
会場　本館企画展示場


「知的生産の技術」のための「こざね」
（撮影：尼川匡志）

ミンパク オッタ カムイノミ（みんぱくでのカムイノミ）

例年11月頃、本館に所蔵されているアイヌの標本資料への感謝と安全を願い、北海道アイヌ協会の協力をえて、実施しておりますカムイノミですが、本年は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、非公開とします。

みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展「先住民の宝」の会期中に運行します。

運行日　12月15日(火)までの土曜・日曜・祝日
運休日　1日11往復、所要時間10分、無料
　平日、11月1日(日)、3日(火・祝)、7日(土)、8日(日)

※急遽予定を変更する場合があります。
※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、座席数などが従来の運行と異なります。くわしくはみんぱくホームページをご覧ください。

大阪モノレール
万博記念公園駅発

時	万博記念公園駅→国立民族学博物館
10	06　36
11	06　36
12	46
13	16　46
14	26　56
15	26　56
16	
17	

国立民族学博物館発

時	国立民族学博物館→万博記念公園駅
10	50
11	20
12	30
13	00　30
14	10　40
15	10　40
16	30
17	00

共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ――」

佐々木高明(元民博館長)が撮影した熊本県の五木村での焼畑に関する写真を中心に、民具などの資料を含めて当時の村の暮らしを紹介します。

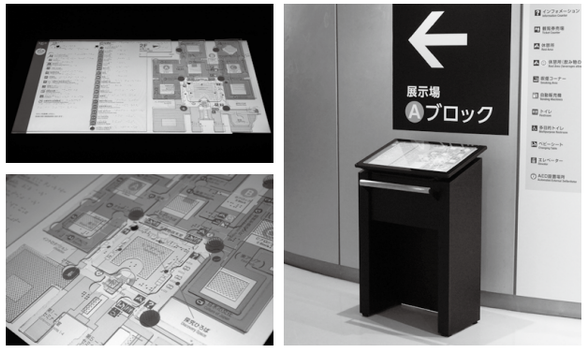
会期　11月29日(日)まで
会場　五木村歴史文化交流館「ヒストリアテラス五木谷」
休館日　月曜日(祝日の場合は翌日)
主催　国立民族学博物館、五木村

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

デジタル触地図(国立民族学博物館触知案内板)が「2020年度グッドデザイン賞」を受賞

本館のデジタル触地図(国立民族学博物館触知案内板)が、2020年度グッドデザイン賞(主催：公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞しました。

デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。すでに本館の展示場に2台設置され活用されており、今後も設置を増やす計画をしております。さらに標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しております。



展示場に設置されているデジタル触地図

みんぱくゼミナール

会場　本館講堂
※要事前申込(先着順／定員各回160名、参加無料
（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）
※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配付します。

第504回　11月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
ミュージアムが社会を変える――水俣の遺産
講師　平井京之介(本館 教授)
博物館や資料館はただモノを保管するだけではありません。現在、その社会を変える力が注目されています。熊本県水俣市の資料館を事例に、負の遺産がどのように利用されているかをお話しします。
【申込期間】
■一般受付
期間：11月19日(木)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第505回　12月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
民博研究の政策としての応用――トランスフォーマティブ研究事始め
講師　出口正之(本館 教授)
民博の展示品を見て皆さんは何を感じますか？　もし、従来の「常識」が覆されたなら、それがすべての「研究」の始まりです。民博の研究が税制、NPO政策、大阪の活性化政策などに活かされています。「常識の残像」から脱するために民博がいかに役立っているかをお話しします。
【申込期間】
■友の会(維持会員・正会員)電話先行受付
期間：11月16日(月)～20日(金)
■一般受付
期間：11月24日(火)～12月17日(木)
【ゼミナールの申込方法】
本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。右記の該当期間中にお申し込みください。
■友の会(維持会員・正会員)電話先行受付(定員30名)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話　06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）

■一般受付
・オンライン予約(定員100名)
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(定員30名)
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう
会場　第5セミナー室
※申込不要(当日先着順／定員各日42名)、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

11月1日(日)14時30分～15時(14時開場)
100年前のアイヌのくらしと現代の文化
話者　齋藤玲子(本館 准教授)
11月8日(日)14時30分～15時15分(14時開場)
サーミの工芸品
話者　庄司博史(本館 名誉教授)
11月29日(日)14時30分～15時(14時開場)
アフリカの先住民について
話者　池谷和信(本館 教授)

刊行物紹介

■川瀬慈 著
『エチオピア高原の吟遊詩人――うたに生きる者たち』
音楽之友社　3,000円(税別)

エチオピアの吟遊詩人、アズマリ、ラリベラが、地域社会において人びととの豊かなやりとりに基づいて展開させる芸能の様子を描き、アフリカの地平から音楽・芸能を相対化してとらえ、考えることを促す。アフリカの吟遊詩人のリアルな息吹が感じられる1冊。

友の会講演会

【聴講方法】
①本館講堂にて聴講(定員160名)
友の会会員は予約不要(当日会員証提示)
一般は500円(受付フォームより要事前申込)
②オンライン中継での聴講(友の会会員のみ／受付フォームより要事前申込)
※受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

第506回　11月14日(土)13時30分～14時40分
呪術として生き残った仏教――社会主義期モンゴルにおける世俗化・仏教実践・還俗ラマ
講師　島村一平(本館 准教授)
ソ連を中心とした旧社会主義国では、無神論が標榜され宗教が抑圧されていたことは知られています。しかし社会主義期、宗教は無くなっていたのでしょうか。この講演では、かつて社会主義国だったモンゴル国を事例に、社会主義による世俗化は、実は「呪術化」だったのではないか、という逆説を提示します。モンゴルは、人口の6割ほどがチベット・モンゴル仏教を信じている「仏教国」です。本講演では、モンゴル仏教の現在から過去を見ていきます。
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/506tomo/

第507回　12月5日(土)13時30分～14時40分
海洋考古学の世界――沖縄の水中文化遺産とその魅力
講師　小野林太郎(本館 准教授)
海洋考古学は、海と人類の歴史を探求する学問です。そのフィールドは、海中の遺跡だけでなく、島や沿岸域に残されたさまざまな遺跡が対象となります。この講演では、そのなかでもとくに水中文化遺産を取り上げ、これまで研究してきた沖縄県石垣島の海底遺跡を事例に、その魅力や水中遺跡の保護の現状について紹介します。あわせて、水中文化遺産をめぐる世界的な動きや今後の課題についても解説します。
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/507tomo/

世界の
バスケタリー
×
バスケタリーの
世界

森の民の知恵
――バスケタリーの起源をさぐる

植物資源を加工して作るバスケタリーは、地球上の緑のある、あらゆる場所でその技術を確認することができる。バスケタリーはなぜ生まれたのか。その技術はどのようにして見いだされてきたのか。世界をまたに掛け、狩猟採集民の生活を追う研究者が、その謎に挑む。

池谷（いけや） 和信（かずのぶ）
民博 人類文明誌研究部

アマゾンとアフリカの運搬具

南米・アマゾンの森でウーリーモンキーなど樹上の小動物をねらう吹き矢猟に同行した際に、ハンターの男性とともに二人の女性がついてきた。いったい何をしにくるのかと思っていたら、目的地に着くといっせいにわたしの腕より長い、大きな葉を集め始めた。わたしは、猟に同行してジャングルのなかにいたので、女性たちの行動をつぶさに見ることはできなかったが、帰るときになって驚いた。彼女たちは、集めた大きな葉を組み合わせて、直方体のかごを作っていたのだ。かごのなかには、その材料と同じ植物の葉が並べられている。集めた葉は集落にもち帰り、家の屋根材として利用するという。かごは葉を運ぶための運搬具だった。

当時わたしは、カラハリ砂漠における狩猟採集民サンの村で長期滞在を終えて、アマゾンの調査地に移動したばかりだった。サンの場合は、獲物の肉を運ぶ際に束ねるロープや女性が外出の際にもち歩くバッグはすべて動物の皮をなめしたもので作られている。また、バッグには皮を細長くした紐がついている。素材をねじることはあっても編むことはほとんど見られなかった。

カラハリは砂漠といってもサバンナなので、葉のついた樹木はあるが、人びとが植物を素材としてバッグやかごを作ることはほとんどない。小動物を捕獲する罠の材料の一部として、草本植物の繊維をとり出し束ねて、ねじってできる紐が使われる程度であった。

森の恵み、バスケタリー

東南アジアにおける森の民の村では、植物素材で編まれたものを各地で見る機会があった。ある集落では、ひとりの男性が細長くしたラタンの樹皮を組み合わせて大きな敷物を作っていた。それは、縦が三メートルを超え、横は一メートルの大きさがあり、近くの農村で販売するために作っているのだそうだ。実際に、一枚の敷物が一頭の豚と交換されているのをわたしは見た。豚肉は、森の民の好物のひとつである。

一方で、定住を強いられ、植物を採取できるような森が周辺にない別の村でも、女性が植物素材で編んだバッグを作っていた。女性は、遠くの森で採取してきた樹皮を薄く裂いて、それをねじって紐を作る。そして、それをクロスして編み物のようにしていくのだ。編まれたバッグには、緑や茶色の樹液が塗られていて見た目が美しい。これを訪問者に販売するというのもうなずける。

アマゾンの先住民ワオラニが作る小さなかご ©Pete Oxford/Steve Bloom/amanaimages

東南アジアの村で作られる、ラタンの樹皮を編んだ敷物（撮影：中井信介、2015年）

はたして日本はどうであろうか。日本の山村ではどこでも、植物のつるや樹皮を使用したかごや袋を見つけることができた。とくにわたしは、新潟県の山中で山菜採りを生業（なりわい）としている男性に弟子入りしたことがあるので、ゼンマイを入れるバッグや「テンゴウ」とよばれる袋が印象に残っている。その袋に二〇キログラム近いゼンマイを詰め、足元に注意をしながら採集キャンプまで運んだことを思い出す。これらの袋類は、雪深い山村において冬のあいだに女性によって作られていた。日本は国土の大部分が森林におおわれているので、多様な植物を利用したバスケタリーの技術が、世界のなかで見てもよく発達してきたのであろう。

編む、組むの起源を考える

それでは、いつからどのような過程で人類は植物素材を編んだり組んだりして、バスケタリーの技術を作りあげてきたのであろうか。例えば、縄文時代の考古遺物として紐が残っているが、植物をどのように加工したのか、その方法を知ることは難しい。しかしながら、アマゾンのかごも東南アジアの敷物も日本の袋類にしても、その技術が伝播（でんぱ）したというよりは、おのおのの自然環境に応じて、地域で独立して生まれたようにも思える。これらは、森の民の知恵のひとつであり、人類の創造力の大きさを見せてくれるものだ。

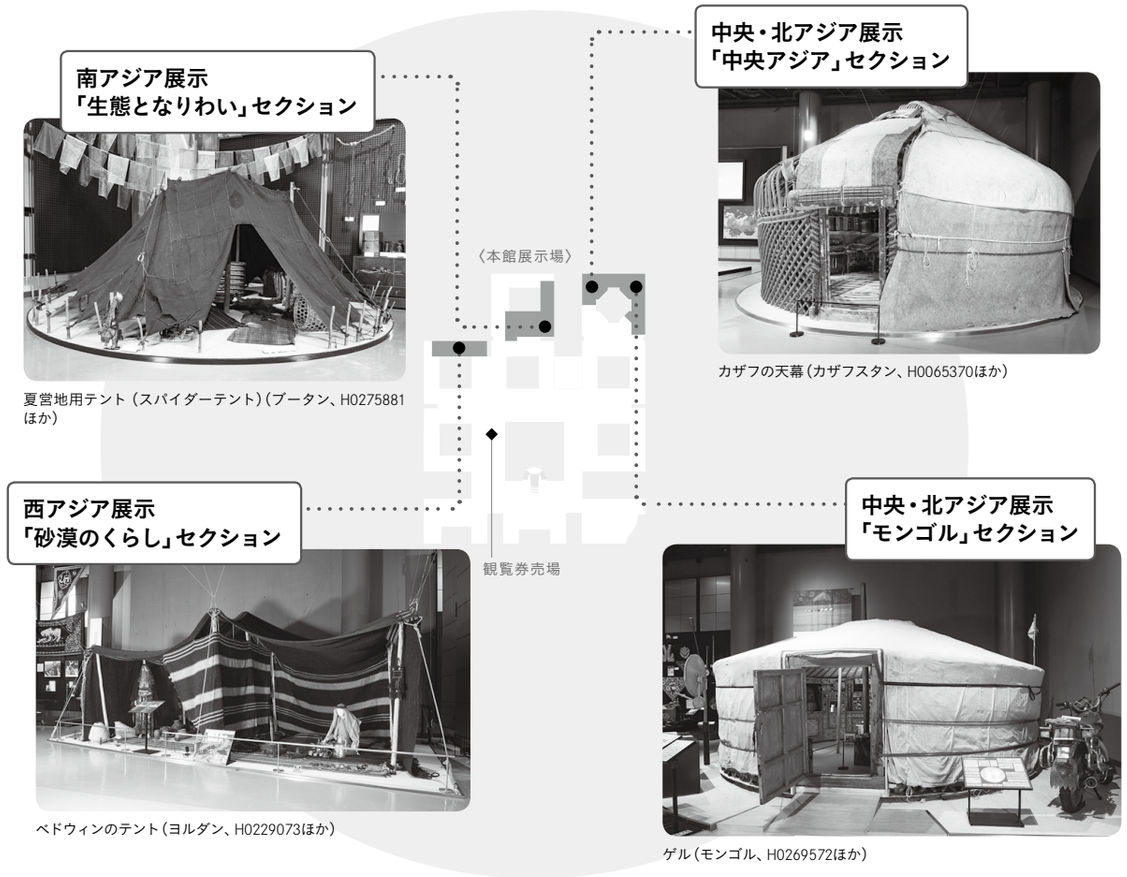
わたしたち人類は、約三〇万年前にアフリカのサバンナで誕生したという。当時は、動物の皮のほか、腱（けん）を糸のようにして束ねてねじることで道具や装身具の材料に使用していた可能性が高い。その後、人類は豊かな森に移動して植物を利用するようになった。その結果、細やかに編まれたかごやバッグなどが各地で独自に生まれたのではないかとわたしは考えている。

右：薄く裂いた樹皮をねじった紐で編まれたタイのバッグ（個人蔵）
左：なめした動物の皮で作られたサンのバッグ（ボツワナ、H0204616）

藁紐で編まれた「テンゴウ」。背中にかついで使用する（日本、H0131329）

牧畜民のテントをめぐる

人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター研究員　辛嶋（からしま） 博善（ひろよし）



夏営地用テント（スパイダーテント）（ブータン、H0275881ほか）

カザフの天幕（カザフスタン、H0065370ほか）

ベドウィンのテント（ヨルダン、H0229073ほか）

ゲル（モンゴル、H0269572ほか）

牧畜は人類が依存してきた生業様式のひとつであるが、天候に大きく左右されるうえに、居を移す不便な暮らしというイメージをもたれてしまっているようである。しかしながら、家畜飼養において、住居を移すことは理にかなった手段である。牧畜民が居を移す理由は、家畜の飲用水や食料となる草を求めるためであったり、夏には風通しのよい台地や平原を、冬には日当たりがよく北風を防げる山の南斜面などを利用するためであったりする。定住地に水や食料を運んできたり、ヒーターやクーラーを常時利用したりするよりも、人間が家畜と一緒に居を移すことでコストを抑えることができるならば、それは十分に合理的である。

こうした移動を容易にするのがテントの存在である。現在、民博には、四点の牧畜民のテントが展示されている。南アジアと西アジア展示にひとつずつ、中央・北アジア展示にはふたつのテントがある。テントと聞くと登山愛好家やキャンプ上級者の方々を別にすれば心もとなく感じるかもしれない。しかしながら、厳冬のモンゴルやシベリアでもテントで暮らすことができるように、ある程度の居住性が確保されてきたのは間違いない。

テントの構造とそのくらし

西アジア展示のベドウィンのテントは、ヤギの毛で織られた布を地面に張り、柱でもち上げて支える構造のものである。これに対して、中央・北アジア展示のふたつ、すなわちカザフ、モンゴルのテントは骨組みだけで自立できるタイプである。骨組みは、折り畳み式の側壁と天窓、屋根などからなり、円柱形の側壁の上に、円錐形の屋根をのせたような構造になっている。なお、このふたつのテントは似た構造になっているが、細かな違いもある。屋根は天窓から側壁に向かって骨組みとなる棒を放射状に並べるのだが、モンゴルの棒がまっすぐであるのに対し、カザフの棒は側壁に接する方の先端部分が、地面に向かって折れ曲がっている。これによってカザフのテントはモンゴルのものに比べてより高くなるが、風の影響を避けるためにモンゴルのテントのほうが低くなっているともいわれる。

さて、こうしたテントであるが、それぞれの牧畜民にとってはプライベートな場であるばかりでなく、パブリックな場にもなる。ベドウィンのテントの場合には男女のスペースは仕切りによって区切られており、男性のスペースは客間としての役割ももっている。モンゴルの場合、物理的な仕切りはないが、男女、あるいは主人と客のスペースがわかれている。現在ではそうした男女や主客の区分は以前ほど厳格でないようだが、その感覚は残っている。

ベドウィンはテントで客をもてなすときにコーヒーをふるまうが、それは男性の役割とされる。一方、モンゴルでは茶が供されるが、それを用意するのは女性である。コーヒーと茶の違いは伝播（でんぱ）、あるいは交易における地理的な要因と関係があろうが、牧畜という生業によってそうした役割がどちらかの性に決定されるわけではないようだ。

ちなみに、展示場では、ここ一〇〇年程のあいだに使われてきたモンゴルの茶とその道具を紹介している。社会とともに、茶のあり方が変化する様子もぜひご覧いただきたい。

季節への対応

近年の日本の夏の酷暑は室内でも熱中症を引き起こしかねないが、乾燥地であれば日陰に入ることで暑さをやり過ごすことができる。忘れがちであるがテントは直射日光を凌（しの）げるものでもある。最近では自家用車が普及して様子が変わりつつあるが、モンゴルでは草原で開催される競馬大会にもテントを持参していたものである。

季節によって、テントのたて方は必ずしも同じではない。モンゴルのテントの場合、側壁の布やフェルトを、夏は開閉できるようにしているが、冬は地面と接する部分に土を盛って固めて隙間風が入らないようにするなど、季節によってたて方を変えることがある。

南アジア展示のブータンのテントは夏用のものである。テントは支柱と多数の枝を使って、絶妙なバランスで張られている。この夏用のテントは、夏のあいだは涼しい場所を求めて標高の高いところに家畜を連れて行き、そこで居を構えるために用いられる。夏と冬にそれぞれ高地と低地を利用する牧畜を特に移牧とよぶことがあるが、ヨーロッパなどでも見られるものである。

牧畜、あるいは家畜飼養という生業にあまりなじみがない日本であるが、日本の文化展示「日々のくらし」セクションでは、日本の移牧についての解説パネルもある。日本でも同様の発想が見られたことは興味深い。

冬営地のテントの傍らにはヒツジ・ヤギ用の牧柵がたてられる。柵のなかに家畜を隙間なく押し込み、互いの体温を利用して夜間に凍えないようにする（モンゴル、2011年）

シネ倶楽部

信仰と官能のあいだで

新免光比呂
民博 超域フィールド科学研究部

「バベットの晩餐会」

原題：Babettes gæstebud

1987年／デンマーク／デンマーク語・スウェーデン語・フランス語／104分

監督・脚本：ガブリエル・アクセル

出演：ステファーヌ・オードラン、ビアギッテ・フェザースピール、ボディル・キェアほか

作品のロケ地となったモーロプ教会。ユトランド半島北部の海沿いに建つこの教会は、海岸浸食の影響を受け、2016年には撤去された（2004年）
（Photo：Wikimedia Commons,CC BY-SA 3.0）

ふたつの宗教集団的行動

新型コロナウイルスの影響は世界各地におよんだが、そのなかで際立つふたつの集団行動があった。ひとつはプロテスタントが主流であるアメリカ合衆国でロックダウンの解除を求めて銃をもった住民たちがデモをおこなったこと、もうひとつはローマカトリック教皇お膝元のイタリアで通常業務への復帰に反対して労働者のデモがおこなわれたことである。どちらもありふれた海外ニュースであるが、そこからはプロテスタントとカトリックの文化的影響による対照的な性格が読みとれる。コロナの危険性がありながらも個人の自由を主張するプロテスタントと共同体の成員の安全を優先するカトリックの違いである。

美食は罪か、人生の醍醐味か

さて、映画「バベットの晩餐会」は、デンマークの片田舎に住む信心深い人びとの宗教共同体（ある牧師が創始し、その娘である姉妹が継承）にパリの革命（一八四八年）を逃れた天才料理人がたどり着き、心の静謐（せいひつ）を得ることができた恩返しに宝くじで手に入れた一万フランすべてを使って料理を振る舞うといったストーリーである。映画の細部はよくできていて、信心深くも狷介（けんかい）な老人たちを描写するたくまざるユーモアと北国の自然環境の厳しさ、宗教的な家族の葛藤、愛の喜びと諦観が映像的表現によって見事に描かれる。ローマ教皇も愛した映画であるという風評からは、キリスト教における信仰（禁欲）と官能のせめぎあいというテーマが浮かび上がる。

映画の舞台であるデンマークは、ルター、カルヴァン、メランヒトンなどに主導されたキリスト教改革運動の流れをひき、聖書の重視、教会における伝承の権威と聖職者階層の否定などの特徴をもつルター派プロテスタントの地域である。映画では神への賛美と清貧と禁欲が強調されている。貧しい食事に甘んじ、質素な生活を律する人びと。生の喜びより神を称えることが重視される。とはいえ、どんなに素晴らしい信仰をもっていても、人は疑い深く、狭量で、悲観的でありうる。過去の誘惑と詐欺をめぐって誣（しいた）う信者を目にして姉妹も深い悲しみと亡き牧師への想いにとらわれる。そこに一万フランと人生をかけた芸術的な料理が投げ込まれるのだ。革命ですべてを失ったバベットが渾身の力を込めて料理した品々は、芸術的な、洗練された料理による味覚の官能的喜びによって、老いを迎え、疑心暗鬼で閉ざされた人びとの心を開き、一時的ではあるが集団の共同性を開示する。またかつて姉妹への愛を諦め、出世の道を歩んだものの、その虚しさに疲れた将軍も過去の愛の思い出とともに料理で生の充溢（じゅういつ）を知る。

神の意志はどこに？

そういえば映画では音楽も強調されていた。主人公である姉妹はつねに歌によって神を賛美する。かつて姉妹を愛したパリの声楽家もまた肉体だけでなく、歌を通して超越的なるものを求める。老いを迎えたとき、彼はバベットを姉妹へ紹介する手紙を書きつつ、虚しさの果てに歌を超える存在に気づくのだ。あるいは、共同性に目覚めた信者たちは、会食後に満天の星の下で輪になって手をつなぎ、ともに歌う。そもそも改革者の一人であるルターは音楽を愛し、音楽によって神を称え、神の喜びを感じたという。映画は人間の信仰と官能について原理的な問いを投げかけるが、映像を観る限り官能もまた信仰と人生を味わい深いものにするようだ。

余談ではあるが、原作者カレン・ブリクセンは映画「愛と哀しみの果て」の原作者でもある。こちらの映画では、デンマーク貴族夫妻がアフリカにわたり、植民地経営者の一員として生きる姿が描かれる。妻は夫の浮気、夫からうつされた梅毒、夫婦生活への懐疑などから冒険家と恋におち、やがて生き直すことを試みるのだが、冒険家の死によって故国に帰る。問題はブリクセンもまた白人の植民地経営者であったことである。彼女の白人至上主義、人種的優越意識、倫理観の欠如がポストコロニアルの論客から批判されている。実際にどうであったのか知ることは難しく、性急にブリクセン批判に加わることはできないが、「バベットの晩餐会」で示された静謐で味わい深い宗教共同体と料理の芸術性の一方で、白人優越の人種的差別を内包したヨーロッパ人による植民地経営に参加していたブリクセンの一面も忘れることはできない。

フォアグラとウズラのパイ詰めトリュフソース添え。バベットが姉妹にふるまったメニューのひとつ
（Photo：Mogens Engelund,2008,Wikimedia Commons,CC BY-SA 3.0）

ことばの迷い道

先生、僕にはアブガイが３人いるんだよ

島村 一平（しまむら いっぺい）
民博 超域フィールド科学研究部

モンゴル高原は広い。ロシアのシベリアからモンゴル国を経て中国の内モンゴルまで国境に跨（またが）って草原は延々と続いている。当然、「モンゴル人」と自称する人びとも国境に跨って暮らしている。そんな広いモンゴル世界を旅していると、「方言」の違いに驚かされることも少なくない。例えば、社会的地位が高い「えらい人」のことをモンゴル国では「大きな（トム）長（おさ）（ダルガ）」と言う。ところが内モンゴルに行くと「ブドウンな長（ダルガ）だ」という言い方をする。このブドウンとは「太った」という意味の形容詞である。むかし、内モンゴルでフィールドワークをしていて、「今からブゥドゥンな長と会う」と聞かされて、細身の人が出てきて面食らったことがあった。

さてモンゴル国の国語（モンゴル語ハルハ方言）に「アブガイ」ということばがある。妻を意味する語なのだが、ちょうど日本の関東地方の「カミサン」や関西地方の「ヨメ」「ヨメハン」のように、夫がもっぱら自分の妻のことを他者に語るときに使うことばである。具合の悪いことにアブガイは「カミサン」「ヨメ」の他に「中年女性」という意味もある。さしずめ「オバサン」や「オバハン」に相当する語といえようか。というわけでアブガイということばは、モンゴルの女性たちにすこぶる評判が悪い。一方、モンゴルの男たちは「アブガイってのはな、アブ（貰え）・ガイ（害）っていうくらいだから、害なんだよ」という俗説をもっともらしく話す。たいてい男の妻がいないときに限って。弁護士や医者、学校教師のおよそ七割が女性、という女性の社会的地位が高い国ならではの、男のうさ晴らしなのであろう。

が、ここで紹介するのは、別の意味の「アブガイ」。じつは、マイノリティのブリヤート人のあいだでは「姉」のことを「アブガイ」と言う。今から二〇年ほど前、モンゴル国のドルノド県の北部（ブリヤート人居住地域）でフィールドワークをしていたときに聞いた話だ。地元の小学一年生の男児（ブリヤート人）が、「先生、僕にはアブガイが三人いるんだよ」と担任の先生に話した。もちろん彼は「姉」という意味でアブガイということばを使ったのだが、教師は首都ウランバートルから赴任してきたハルハ人女性（モンゴル国の人口の八〇パーセント強を占めるマジョリティ）だった。

驚いた彼女は「なんてことを言うの！　あんたは小さいのに奥さんが三人もいるなんて、ふざけるのもいい加減にしなさい！」と男児を叱りつけた。ブリヤート語を知らないハルハ人の女性教師はアブガイを「妻」だと理解したのである。しかし、ブリヤート人の男児は自分が何で怒られたのかもわからずに、口をぽかんと開けていたのだという。

内モンゴルで、西部地方の出身者の方から「うちのバーブガイ（妻）を紹介します！」と言われ、びっくりしたことがある。モンゴル国のハルハ方言では、「バーブガイ」とは「熊」のこと。どんな人が出てくるかと思いきや、これまた細身のすらっとした方でびっくり。日本語でもひとむかし前には「うちのヤマノカミ」なんて表現があったが、「うちの熊」って‼　「方言」は怖い。

月刊みんぱく 2020 11月号

編集後記

秋も深まり温泉が恋しい季節になってきた。だが、新型コロナウイルスの感染予防の観点から、温泉に行くことを控えている読者もいることだろう。せめても読んで楽しめる温泉の話題をお届けすべく、本号では「世界温泉めぐり」という特集を組んでみた。考えさせられたのは、それぞれの土地でいつから今のような施設や入浴法が生まれ、どう変わってきたのかである。日本の温泉を顧みると、ここ数十年来、近所の銭湯の減少とは裏腹に都市近郊型の日帰り温泉が増え、公衆浴場は健康ランドやスーパー銭湯に姿を変えてきた。他方で、最近の温泉宿では露天風呂付き個室が増えて高級化路線も進んでいる。近所の銭湯文化が風前の灯火（ともしび）であるなか、日本の温泉文化はどう変わっていくのだろう。秋の夜長、その来し方行く末に思いをめぐらせてみるのも一興ではないか。

9月まで対面の編集会議が開けなかったなどの事情から、特集の総論を編集長自らが引き受けることになってしまった。褒められたことではないが、これも新型コロナウイルス感染拡大の余波だとお許し願いたい。この重苦しい時期が明けた後には、山中由里子さんの弁ではないが、海外の温泉に入ってみたくなる人が増える気がするのは、わたしだけだろうか。（南真木人）

●表紙：ネパール中部ラスワ郡のチリメ温泉。神名は聞きそびれたが、湯口には源泉を祀る数本の柱が立っていた（撮影：南真木人、1987年）

次号の予告

特集

「激変する世界と観光の現在」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

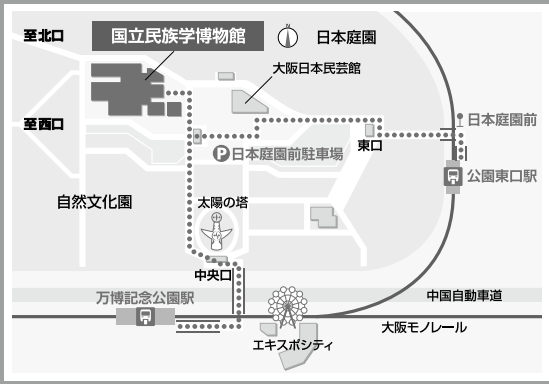
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2020年11月号
第44巻第11号通巻第518号　2020年11月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　株式会社 遊文舎

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology